

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	夏十句：俳句：文苑
Author(s)	紫川；梨雨
Citation	龍南會雜誌，74：38-39
Issue date	1899-10-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5382
Right	

あらははに、つよく、おこそかに
光をなぐる日にかはり、
かすけくよはく、おぼるげに、
てらせる月の影ははた
此世の人にねむれどや、
深き思にしづめよと。

此世に月のてりそめて
今は幾よをへたりけむ、
あゝ物かはり星うつり
太古のさまは今いづこ、
偽の風ふきすさび
ねたみの雨はふりしきり
此世は末になりゆけど
見よや御空の月の影、
かはる浮世をかはりなく
てらす光のれかまざるや

空に雲なく風もなく
月冴えわたる此夕、
理想の舟にうちのりて

光の海に棹さして
飛び行く魂ははたいくつ、
昔を忍び今思ひ、
浮世はかなき夢思ひ、
故郷の空の月思ひ
草葉の露を名残とて
れつる涙を残えれき、
月宮さしてのぼりゆく
浮世の魂ははたいくつ。

夏十句 紫川

から渡る白衣の兵や夏の川
水浴の歸り淋しき田圃かな
日は斜心太賣る坂の下
虚無僧の鮮喰うて居る野茶屋かな
水打つや日は午にせまる停車場
手燭して庫裏にはいるや五月雨
子子や涸れてしまひし鉢の水
海港に秋近づき玄灯かな
川狩の誘うて行くや垣の外
菅生瀧

瀧壺や巖に字を書く夏の人

秋立て蚊帳のつりてのゆるぎ哉 梨雨

つりれきの蚊帳に秋たつ書生部屋

釣をまて歸る片手や女郎花

禿山を馬のこえゆく残暑哉

絹の羽織浴衣扇の残暑哉

荒寺や蟻螂縁に動かざる

秋の蚊や血をすひすぎてあはれ

さびしさや夕雲うつる秋の水

雜報

秋風來

火降頼れ盡して秋風速りに鳴る。面白き哉此頃
の天地。浙瀝の音颯々の勢。一過又一過。櫻葉先
つ落ち、梧葉之に次ぎ、檜葉、榎葉、柿葉、梨葉、飛
ひ去り散り過ぎて梢頭剩す處稀に、慘淡の氣正
に山川を包めり。仰ぎ見れば、天高雲歛、月あり
光水の如く、雁あり影舟の如く、風あり其勢切々

俯きて足下に觀れば、斷草離々たり、露あり星の
如く輝き、蟲あり聲玉の如し、花あり其姿嬌々。
嗚呼龍山の麓秋風來れり。歡樂極今哀情多、暑中
故山の夢覺め來つて此秋風に驚かざるもの果し
て幾人ぞ、青山歷々郷國夢、黃葉滿々風雨秋、あ
わ之れ遊子の情也、誰か之を咎むるを得ん、誰か
之を否定せん。拱手靜に想ふ、故園老親あり、白
髮此秋風と共に加はるるれ幾條ぞ、飛陽撃き難
く流光追ふ可からず、歲月の倏忽として、吾業の
遅々たるを思へば、梢頭の風。草間の蟲、何れか
遊子の濃情を感愴せまめざる。

さはれ、吾人は今や龍南の學窓にある者也、窓を
拂ひ燈を剪り、黃卷を携へて淨几に倚れば、期新
に、課新に、書新に、人亦新なり。方に讀む可くま
て思ふの時にあらず、荀子曰すや、吾嘗終日而思
矣不如須臾之所學也、忘想の翼を假りて無邊の
海上を翹らんよりは、頭歩を擧げて實行を剎那
に期せんこそ千里に到るの徑路なれ、此間の消
息諸卿既に知悉して餘りあり、豈吾輩の呶々を
要せんや。唯夫れ此清新の好機を失せず着々希
望の彼岸に向つて進まん哉。